



欧州道 遙録

— 写真を撮る 愉しみとともに —

旅に出るとさまざまな出会いがある。
美しい風景や壮大な建築物、料理や名産品……
忘れたくないそんな思い出を残すのが写真。
今回は、写真家山口規子さんが欧州各地で撮った
心に残る1枚を撮影のコツとあわせてご紹介。
目の前に広がる風景を新たな視点でみる
写真を愉しむ旅は、驚きと発見に満ちている。

山口規子＝文・撮影
Text & Photo by YAMAGUCHI Noriko



**ドイツ
ドレスデン**
エルベ川に映り込んだ光を大切に、建築物は全部入れず、ポイントとなる形の建築をなるべく画面の右か左に入る位置に自分が移動して撮影。夜景は手ブレにも注意。



フィンランド サヴォンリンナ ペーロスヤルヴィ湖
画面のなかに何か1つポイントとなるものを見つける。この場合は左端のベンチ。湖面が鏡のような時は、中心で2つに分けてシンメトリー構図に。また、同地で撮った12、13頁は画面中央に棧橋を入れ、より奥行き感を演出。同じ場所でも撮り方で印象が変わる。

AGORA
Special
vol.362

旅



心を捉える 美しい風景 時間の流れが 彩りを生む

に出るということとは、日常から離れ、いつもと違う場所です。違う文化や風景、人やモノに出会うこと。そこで経験したことは、やがて心の栄養となり、蓄積されていく。デジタルカメラやスマートフォンの普及により、多くの人が写真を撮り、SNSに投稿したり、気軽に記録ツールとして活用したりする時代になった。「旅」と「写真」は切っても切れない。そして、思い出を残す写真から、自己表現をする写真へと変わりつつあるのも昨今の流

れである。写真に重きをおいた旅は、モノの見方が一味変わるような新しい発見がある。そんな「写真目線」で、欧州の旅へご案内しよう。ヘルシンキ・ヴァンター国際空港へ降り立つと、緑豊かな木々の香りに包まれた。フィンランドは国土の七割強が森林、その傍に湖が縫うように巡らされ、まさに森と湖の国である。ヘルシンキ中央駅から電車で約四時間半、サヴォンリンナへ向かう。車窓には、短い夏を楽しむように木々の葉が重なり合い、花が咲き乱れていた。目的地のペーロスヤルヴィ湖（二二、一三、一四頁上）に着いて、早速、撮影場所を探していると、音が少ないことに気づく。聞こえるのは自分の足が草を踏み分ける音と、時々魚が水面を跳ねる音だけ。カメラを向けると湖は一層静まりかえり、鏡のように青空を反射していた。静寂に包まれながら、シャッターを切る。誰もいない世界、この美しい景色を独り占め。写真の旅にふさわしいスタートだ。

フィンランドからドイツのドレスデンに移動すると、人の多さに圧倒される。サクセン王国の首都として華麗な文化を育み、美しい芸術の都として栄えた旧東ドイツのドレスデンは、第二次世界大戦中に戦禍を被った歴史もあるが、東西ドイツ統一から約三十一年の月日



**ドイツ
ドレスデン郊外
バスタイ橋**
奇岩が立ち並ぶクーアオルト・ラーテンの観光地では、あえて人物を入れて、奇岩の大きさを表現。遠方の山々を入れ込み、橋は画面上で対角線上に置くと奥行き感がでる。



エストニア タリン

見たままの明るさで撮る常識から解放されて、暗くしたり明るくしたり、自分のイメージに近づけるのも写真の面白さ。写真現像アプリやソフトを使用して遊んでみよう。



ポーランド クラクフ

グラフィティな壁を発見したら、どの壁面が一番よいか見てから撮る。窓の部分だけ切り取ってもよいし、このように通りを入れて街の雰囲気と一緒に。



ハンガリー ブダペスト

伝統的な建物が対面にあるガラス張りのビルに反射して、新旧融合。自分だけの視点を楽しみながら、青空を入れて高さを表現。この場合は水平垂直を気にせず自由に。



チェコ プラハ

はじめに路地の真ん中から撮るか、端から撮るか決める。狭い路地では縦位置で、少し低めのアングルで奥行き感を出し、ポイントとなる被写体を待つ。



街角での 出会いは一瞬 心躍る何かを 見つけて

旅

風景写真は、美しい場所を見つけることも重要だが、一番大事なのは美しいと感じる「心」かもしれない。

の楽しみの一つに、街歩きがある。知らない街や村を歩くと、目

らの刺激はもちろん、匂い、音など五感を刺激するもので溢れている。そんな街ではスナップ写真がおすす

め。スナップ写真といわれても何を撮影すればよいのか、悩む人も多いことだろう。まずは自らが能動的に動くハンターになること、つまり「見つける力」が必要になる。

瞬間を見つける力、色や形の面白

さを見つける力、光と影を見つ

ける力などを意識することで、何

気ない通りでも心躍るものを見つ

られる。

チェコのプラハは、一四世紀にカレル一世がボヘミア王になり、その後カレル四世が神聖ローマ皇帝となった時代に大きな発展を遂げたヴルタヴァ川両岸に広がる街。ゴシック建築や一六世紀のルネサンス様式の外壁、一七〜一八世紀はバロック建築、一九世紀末〜二〇世紀初頭にはアールヌーボー建築、さらにキュビズム建築など、建築の街としても有名である。今でも中世の街並みが残っているため、年間をとって観光客に人気だ。こ



イタリア ローマ

スナップ写真は瞬間芸。瞬間を逃さずに撮るには常に撮れる状態を保つとベスト。ただし、美術館によっては撮影不可なこともあるので事前に確認を。

